

## ■図書紹介■

社会科の初志をつらぬく会著

## 『21世紀社会科教育への提言 1 問題解決学習の継承と革新』

明治図書, 1997年, 150頁, 1,450円\*

保坂秀夫

本書は、「社会科の初志をつらぬく会」が、設立40周年の節目に当たって、問題解決学習による授業、そして広く学校教育のあり方を世に問うたものである。会の歴史、理論、授業実践のみならず、従来必ずしも明確に打ち出されてきたとは言い難いカリキュラムに関する新たな提言、自己点検や反省を含め総括した形で扱われている。

「初志の会」は、ここで言うまでもないことだが、戦後の経験主義に基づく新教育が系統主義的な学習へと転換される、その危機の中で設立されたものである。この会が一貫として保持してきたもの、すなわち“初志”とは何かを、いま改めて表明すること、これが本書の基軸と言ってよいであろう。その初志とは、昭和22年版、26年版の学習指導要領に表されたものであり、新憲法の方針と民主主義をバックボーンとし、社会科を核とした子ども主体の授業、生活経験に基づいた学習、理念（民主主義、学習法）と実践（学習形態、経験）を一にしようとする哲学、戦争の反省に基づく系統主義・注入主義・権威主義に対する徹底的な抵抗、などが挙げられる。

現時点でこの“初志”を問うことには、とりわけ意味がある。初志の会のメンバーのみならず、社会科教育に関わる全ての者にとってである。総合学習、体験学習の必要性が言われ、個性の重視、“生きる力”を養う重要性が言われ、新学力観として目指されているもの、その公教育の趨勢と、この初志とが、今まさに交差する時点にあるからである。

それはまた、社会科が小学校低学年でなくなり、高等学校で解体し、追い詰められたような立場にあることとも、もちろん無縁ではない。どういう社会科が追い詰められ、どんな教育形態や学習が新たに生まれようとしているか、それは是か非か、現在のまさに動いている状況を厳しく分析していかなくてはならないが、初志の会の蓄積してきたもの、その過去と現在の言動と重なり合っている部分があることを否定することはできないだろう。

というのも現在まで、優れた社会科の授業実践と言われたもののモチーフなりエッセンスのほとんどが、昭和20年代の初期社会科の中に見られると言っても過言でないからである。またそのような授業の実践家で、初志の会に属するか否かは別に、これに影響を受けた者が少なからずいることも事実であろう。本書においても、総合学習、新しい学力観、生きる力などを考えるうえで、有益な示唆となるものが随所に見られる。

初志の会の40年の歴史の中には、激しい教育論争のいくつかがある。また、迫害ということは実態を詳しく知らないが、低迷する時期もあったようである。そういう中を今日まで、“初志”を貫いてきたこと自体、敬服するに値する。会に対する批判の声も時折耳にしないわけではないが、もしこの会がなかったならばと想定してみると、正直言って肌寒い感じがせずにはおれない。その時は、現在の問題解決学習（総合学習）への回帰現象もなかったかもしれない。

\*埼玉純真女子短期大学

本書は、大学の研究者による執筆が大半を占めている。そのため、読むことにやや粘り強さが必要とされる。しかしそれを超えて、徹頭徹尾、子どもの主体性を考える教育のあり方を主張し、それを継続する理念と信念を学べる本である。とにかく読中読後、いろいろと考えさせられる。いくつか疑問が湧いてこないこともない。会がかつて批判した生活科を、今どう評価するのか。自己の論拠の妥当性を奪いかねない相対主義、多元主義をどう限定するのか。TPO・対象等に応じた、学習方法の多元主義は許されないのか、等々。今後も会の主張、動きに注目していきたい。

## ■図書紹介■

寺本 潔・井田仁康・田部俊充・戸井田克己著

### 『地理の教え方』

古今書院, 1997年, 173頁, 2,400円\*

松崎 康弘\*

学校教育における地理教育の在り方が問われている。21世紀が間近に迫るなかで、「(情報化社会など) 変化する社会への対応」「『生きる力』の育成」「新しい学力観 (関心・意欲・態度の重視)」といったキーワードが提示され、教科教育の各分野で検討されているが、実際は旧態依然としたスタイルの地理の授業が行われていることが少なくないのではないかと。また、「地理は暗記ものである」という意識から生徒の「地理離れ」が進み、社会科解体・世界史必修の流れとも相まって、特に高等学校における地理教育が危機的な状況にあるといっても過言ではないであろう。

本書は、これからの地理教育学を担っていく4名の著者によって、高等学校地理の授業づくりの新しい在り方について、具体的な事例を踏まえて書かれたものである。

第1章「ステップアップ 地理を識る」では、紀行文・映像・地図の作成や収集をもとに地理を「識る」ことが説かれている。「識る」と表現しているのは「体験は情報に勝る」という観点からであり、授業者がそのような観点に基づいて地理の授業づくりをすべきであるとしている。また、映画制作を地理の授業に取り入れようとしたり、「ユニークな地図」「高校生の好む地図」などの収集のような、高校生の実態をふまえた教材づくりを推奨している。

第2章「新しい地理の授業づくり」では、地理とは切り離すことのできない「地図」というテーマ、近年の学校教育において特に注目を集めるようになった「環境」「情報」というテーマ、そして生徒たちの興味・関心が高いであろう「旅行」というテーマで、「新しい地理の授業づくり」が試みられている。小・中学校における「総合的学習の時間」の登場で、高等学校地理が「環境」「情報」というテーマについて担えることが何かということの一端が、飯能市の福田英樹氏の実践などを事例として示されている。

第3章では「地理授業づくりのコツと急所」と題して、プレゼンテーション、AV機器利用、フィールドワーク指導、テスト問題作成のそれぞれの「コツと急所」について記述されている。テスト問題作成については、「知っているだけでは解けない問題」、「基礎的・基本的知識+思考

\*筑波大学大学院博士課程